

十九世紀西欧思想史と〈際限なき進歩〉への抵抗

——J・B・ビュアリとR・ニスベットの観念史研究を再読する——

吉田 耕平

一 はじめに

本稿の目的は、近代西欧の〈際限なき進歩〉という観念を中心として進歩観念の歴史を論じることである。

「進歩の観念 idea of progress」は、西欧思想史の中心的観念の一つである。これは一般に「人間社会は進歩する」という信念——「人間の社会」は「より良く変えられる」あるいは「より良いものになりつつある」とする考え——によって表明されてきた観念である (Weinberger 2005: 1912)。

こうした進歩の観念は、社会科学の歴史に深く関わっていると言われる。それは、とりわけ十九世紀の社会科学と密接に結びついていた^①。そのため、この観念と切り離して十九世紀以来の社会科学史を語ることは難しい。こうした点に進歩

観念史の重要性がある。

では、一九世紀の進歩の観念とはどのようなものだったのか？

よく知られているのは、シュペングラーなど二十世紀初頭の論者による批判的評価だろう^②。進歩の観念に言及する社会学的研究も存在する^③。しかしこれらの議論は、進歩観念の具体的内容を明らかにしてきたわけではない。

この点で強みがあるのは「観念の歴史 history of ideas」あるいは「観念史研究」と呼ばれるアプローチである^④。このアプローチはしばしば歴史の捉え方の研究に利用され、これを通じて進歩の観念の変遷も論じられてきた。

その中で最も重要と考えられるのが、ジョン・B・ビュアリおよびロバート・ニスベットの研究である。この両名は、十九世紀の進歩観念についても有益な知見を有していただろ

う——このことを確認するのが本稿の目標だ。

社会学史研究では、「観念の歴史、知識社会学を組み合わせる方法」を開発した宇賀博の功績が知られる(吉田二〇〇九:八六)。このような方法の先駆者の一人がニスベツトである。ビュアリとの対比を通して、その功績の一端を解明していきたい。

二 問題の所在——「近代の進歩観念」の混乱

これに先立って、本研究の問題関心を述べておく。

近代西欧には様々な歴史の捉え方がある。その一つである〈進歩〉——進歩の観念をこう表そう——の内容も一様ではない。本研究では、そうした多様性について考えていきたい。その背景にあるのは、歴史意識に関する近年の問い直しである。ここでは、一九九〇年頃から指摘される〈際限なき進歩〉の乗り越えという課題に注目する。

この論題を最初に打ち出したのは米国の歴史研究者、クリストファー・ラッシュだと思われる。ラッシュは「近代の進歩の概念化 modern conception of progress」全体を対象として、その特徴が「際限のない indefinite、終わりの開かれた open-ended 改善 improvement」という考えにあるとした

(Lash 1991: 47)。これは、人類や社会がいつまでも、より良

い方向へと変わってゆくだろうとする考えだ。このような観念を本稿では「際限なき進歩」と表したい。

ただし、近代にはもう一つの進歩観念が存在する。すなわち、歴史の進展は「この世における完成という最終の状態 final state」「幸福な終結 a happy ending」へと至るだろうとする考えだ (Lash 1991: 41, 47) ——このような観念を本稿では〈終局に向かう進歩〉と表す。

しかしラッシュによれば、二十世紀の論者たちは〈終局に向かう進歩〉を支持しなかった (Lash 1991: 41)。このことからラッシュは、前述の〈際限なき進歩〉だけが「近代の進歩の概念化」の特徴だったとした。

しかし本当に、近代の進歩観念はすべて〈際限なき進歩〉だと言つてよいのだろうか？ これに関してラッシュが示した根拠は説得的だっただろうか？

この点で対照的なのが、米国の哲学者フランシス・フクヤマの議論である。フクヤマは、「歴史には終点 an end point があるはずだ」という考えこそが近代の歴史観の「最良の部分」だとする (Fukuyama 1992: 58 = 二〇〇五: 一一四)。これは、上述の〈終局に向かう進歩〉に一致する観念だ。フクヤマはヘーゲルらのテキストを用いてこのような観念の存在を

示した。

だがこれに加えて、フクヤマは近代西欧の思想史の研究も参照した。フクヤマは「普遍的な歴史」の捉え方 (Fukuyama 1992: 56 = 二〇〇五: 一一〇) に関して二つの著作を挙げる。

普遍的な歴史を記述しようとする過去の試みに関する二つのきわめて異なった視点については、J.B. Bury, *Idea of Progress ... and Robert A. Nisbet, Social Change and History* (Fukuyama 1992: 348 = 二〇〇五: 二九八)

ここに挙げられた二つの書籍——『進歩の観念 *Idea of Progress*』および『社会変動と歴史 *Social Change and History*』——はともに「普遍的な歴史」に関するものとされている。だが、これらは互いに「きわめて異なった視点」の文献でもあるというのだ。

はたして、これらの「視点」とは何なのだろうか？ それらは本当に、フクヤマの議論を正当化するものだろうか？

興味深いことにウォーラス・テインも同じ著者二名を挙げて、進歩の観念は「西欧哲学の全歴史」に通じるものだとする。だが、それらの内容は述べられていない。

彼によれば、進歩の観念は「ヨーロッパ中心主義」の

「最後の砦」であり、これらを「乗り越える」必要がある (Wallerstein 1999: 177, 184 = 二〇〇一: 三〇七、三一八)。しかし何がその進歩観念であるのかは混乱したままだ。これでは、それを乗り越えようという訴えも空転してしまうはずだ。

このような事態を打開するためには、フクヤマらが参照した二名——ビュアリ (Bury) とニスベツト (Nisbet) ——の著作を確認することが必要だと考えられる。

三 研究史の中の「ビュアリとニスベツト」

三ー なぜこの二人なのか——二次文献の記述では、この二名はどのような人物なのか？

両名は、進歩、観念の歴史に関する代表的な研究者と目される。このことを確認するため、本節では一九世紀の進歩観念史に関する研究史を概観しよう。

そのために、同分野の研究史に関する二次文献を参照する。過去の研究成果の総説や総覧 (Ginsberg 1968; Bock 1978; Lash 1991: 533-569) および辞典類の概説や文献紹介の中から、時代を追ってテキストを読み解く「歴史叙述 historiography」型の研究を拾い出したい。

すると、二十世紀前半に先駆的な研究が行われ (Deville, 1910; Bury 1920; Martin 1929) 其の後も様々な研究が行われた (Edelstein 1967; Pollard 1968; Nisbet 1969, 1980) 其の中でもとくに著名なのがビュアリとニスベットの貢献であることが分かる。

最も言及されるのはビュアリの著作『進歩の観念』(1920, *The Idea of Progress*) である。文中でその所説に触れるものも多し (Weiler 2007: 3669; Ngwane 2008: 531; Ritter 1986: 339; Ginsberg 1968 = 一九九〇: 六一〇・六一一)。

ビュアリの著述は、内容において網羅的、表現において簡潔だったことで知られる (Bock 1978: 40)。そのビュアリが提示した論点は、大きく次の二つだったとされる。

▽ビュアリは、進歩の観念は比較的「近年の創始」であり「十九世紀の後半に頂点を迎える」と捉えた。(Weiler 2007: 3669)

▽ビュアリの考えた進歩の観念は、「人類は科学的な知識を用いて…「歴史の進展を」変えることができる」とする考え方だった。(Ngwane 2008: 531)

これらに対しては、後続の研究者たちによって様々な異議

が出された。その主な批判は、次の二つに集約される (Bock 1978: 42)。

▽進歩の観念は古典古代と中世にも見られた、という批判。
▽進歩は知識でなく「摂理」によるものとされていたはずだ、という批判。

いずれも、現在なお研究者たちの見解が割れる点だ。こうした基本的な争点に先鞭をつけたのがビュアリだったと言える。

一方、ニスベットの著作『社会変動と歴史』(1969, *Social Change and History*) は、辞典類の中には現れない。唯一の例はこれを「変動の理論」の研究と位置づけるものだ (Bock 1978: 79 n.92)。フクヤマのように「普遍的な歴史」の研究と見なす文献は見あたらなかった。

ニスベットの後年の著作『進歩観念の歴史』(1980, *The History of the Idea of Progress*) は、もっと明確に進歩観念史の研究書として挙げられている (Ritter 1986: 344; Weiler 2007: 3671)。ただし、その内容に踏み込む解説は見つからなかった。このため前作との異同も明らかでない。

このようにビュアリに比べて、ニスベットの研究は十分に

解説されていない。しかし、この半世紀の刊行書としては最も多く参照されるものの一つだ。そこで、ビュアリと並べて論じる価値はあると考えられる。

しかしそれらの研究の内容に関して、これ以上は何も示されていない。この二人が「際限なき進歩」について論じていたのかどうかも全く触れられていない。

三二二 どう読むのか——歴史叙述を比較する

では、ビュアリとニスベットは「際限なき進歩」について語っていないのだろうか？

もしそうならば、両名の研究はフクヤマらの議論と関係がないことになる。だが、フクヤマらが本当に全く無関係な文献に言及することは考えられない。

そこで本研究では、次のように考えてみたい。すなわち以上に見た二次文献の方が、ビュアリとニスベットの議論を捉え逃しているのではないだろうか。

このことを確認するためには、両名の研究の内容に立ち入る必要がある。具体的には、上述の三冊を再読し、「際限なき進歩」等の様々な観念への言及を拾い出す必要がある。

だが様々な観念といっても、どのようなものがあるのだろうか。これについては、多種多様な観念の内容を分類した

ファン・ドローレンの研究が参考になる。

まず、人類の歴史は「限りなく上昇していく ultimately going up」と捉えるのが「進歩 progress」の観念。反対に、これを「限りなく下降していく ultimately going down」と捉えるのが「退歩 regress」の観念である。両者ともに人間社会の「変動のパターン」は、長期的に見れば一つの方向へと動いていく」とする考えだ (van Doren 1967: 6)。

また、これらの考えを拒絶する観念もあるとされる。代表的なのは「歴史の中の変動のパターンは反復的 repetitive か循環的 cyclical」とする考えである (van Doren 1967: 6)。逆に言えば、そうした反復や循環を否定するのが進歩や退歩の観念であるとされる。

ただし、論者によっては循環の過程の「部分」を取り上げ、進歩や退歩の過程を見て取ることがある。その場合、ごく短期的に「一つの方向へと動く」ような変化も進歩や退歩と理解されるため、注意が必要である。

一方、進歩観念の内容を見ていくと特殊な論点が色々と現れる。そのうちの 하나가、本稿で注目する次の争点だ。

進歩は「果たされる future(s) cut」と想定する場合、進歩が止まった後…人類は「完全な」状態・条件下

で暮らし続けるだろうと考えることになる。(van Doren 1967: 262)

「これに対して」進歩論者の多数派は、進歩が生じるとすれば、それは際限なく、indefinitely生じ続けるだろうと考える。(van Doren 1967: 262, 強調引用者)

このようにファン＝ドレーンの場合、〈際限なき進歩〉の考えは「多数派」だとされた。ひるがえって、進歩は「果たされる」という考えは少数派であるというわけだ。

では、この点についてビュアリとニスベットはどのように論じていたのだろうか？ 以下ではこのことを見るために、二人の著作を順に読解していく。

両名の著作は、歴史叙述の形で記されている。そこで以下では、それぞれの①研究方法と②研究知見を論定し、両者の異同を明らかにしたい。

読解にあたっては、適宜、伝記的事実や哲学的思想に関する文献を参照する (Temperley 1930; Beard 1955; Goldstein 1977; Stone 2020)。

進んでいる (pedetentim progrediente) と想定し、この進歩は際限なく、indefinitely 続くだろうと推論するような歴史解釈である。(1920: 5 = 一九五三: 二四、訳文修正、強調引用者)

このように歴史の方向は明確で、その継続は際限がないとする進歩の考えをビュアリは想定した。これは、本稿と同じく〈際限なき進歩〉に照準した規定と言える。

この想定のもと、ビュアリはまず近代以前の思想を概観する。

古典古代、すなわち古代ギリシアとローマの哲学では、人間とその社会は墮落し、衰退する存在とされていた。墮落や衰退を否定した思想家も、「未来における着実な継続的生活改善の過程には望みをかけなかった」という (1920: 16 = 一九五三: 三五)。そのため、過去・現在・未来の「総合 Synthesis」は生じなかったのだ (1920: 19 = 一九五三: 三八)。

中世キリスト教の思想を支配した聖アウグスティヌスの哲学はどうか。その特徴は「過去を、未来においてははっきりと望ましい終局へ to a definite and desirable goal 導くもの」として表現する総合にあった (1920: 22 = 一九五三: 四一、強調引用者)。だがそのような発展も、人類の道徳的な改善に

四 進歩観念の分化——ビュアリの研究知見

四一 前近代と近代の相違

ジョン・バグネル・ビュアリ^① (John Bagnell Bury, 1861-1927) は、アイルランドおよび英国で活躍した歴史家である。ケンブリッジ大学の近世史教授としてギリシア史・ビザンツ史研究を牽引したことで知られる^②。

ビュアリは古典の素養に基づき、思想史の研究でも成果を残した。それが『思想の自由の歴史』(一九一三年) および本研究の対象となる『進歩の観念』(一九二〇年)である。ビュアリの有名な規定は、次の通りである。

この観念は、文明が望ましい方向へ進行した、現在も進行しつつある、未来も進行するであろうということを意味する。(Bury 1920: 2 = 一九五三: 二二)

注目されるのは、次のような付言部分である。

この学説は、次のような歴史の解釈にもとづいている。それは、人間は明確な definite 望ましい方向へと徐々に

よるものではないとされていた (1920: 22 = 一九五三: 四〇)。これらのことから、古典古代と中世の思想は、先に規定しておいた進歩の考えとは相いれないものだったとビュアリ是指摘する。

その後、ルネサンス期になると「進歩の観念が生まれる地盤が準備される」(1920: 35-36 = 一九五三: 五三、訳文修正)。だがこの間も、F・ベーコンでさえ「未来における際限のない indefinite 前進を排除する」考えを持っていたという (1920: 35-36 = 一九五三: 五三、訳文修正)。

したがって、一七世紀最初の四半世紀までは〈際限なき進歩〉の観念が見られない——これがビュアリの有名な議論の骨子だった。

四二 〈際限なき進歩〉対〈終局に向かう進歩〉

では〈際限なき進歩〉の観念は、いつ、どこで生じたのだろうか？

ビュアリによれば、それは一七・一八世紀のフランスで姿を現した。そして一八世紀初頭、アベ・ド・サン＝ピエールの著作が「際限のない社会進歩の観念信条を初めて作つた」という (1920: 143 = 一九五三: 一五〇、訳文修正)。

こうした進歩観念の形成は、十八世紀の末に一応の完成を

みる。その内容は、大革命に熱狂したコンドルセーによって明らかにされた。

彼(コンドルセー)は文明や社会の福祉の際限なき進歩が確実であることを一般的に確認することでは満足しなかった。…「彼は」その方向を予想し、その目標を決定し…遠い未来が有望であることを主張したのである。(1920:208=一九五三:二〇九、訳文修正、強調引用者)

ここにおいて初めて、際限のない未来の姿が具体的に展望されるようになった。この事実によってようやく、ビュアリの規定に合致する思想の成立が確かめられたのである。

しかし、これがビュアリの議論の全てではない。この記述の先には、もう一つ重要な展開がある。

はたしてその後、「際限なき進歩」はすぐに盤石の地位を築いたのだろうか？

フランス革命後の思想に関する著述を見てみよう。その中でビュアリは進歩の観念の変容過程を示している。イングラントに関する章では、進歩観念の「分化」が指摘される。

進歩の理論は、二つの異なった型に分化した *theory*。

enclosing…。一つの型、「では」人間の発展は終わりが、ある仕組みである。…他の型、「では」発展は際限がなく、限界は計り知れないし、また、遠い未来にある。(1920:205=一九五三:二三五、訳文修正、強調引用者)

同様のことはドイツでも見られた。「発展は決して終わることはない」という考えは否定される。かわって、「発展はすでに完成された…これ以上進む道は残されていない」という考えが提示された(1920:205=一九五三:二五三、強調引用者)。

フランスのオーギュスト・コントも「際限なき進歩」を否定する側だったという。

コントにとって…未来の社会は人類の最後の状態であって、これ以上の運動はない。…「コントは」「際限のない進歩」という考えを明確に否定したのである。(1920:204,205=一九五三:二九八、強調原文、訳文修正)

このようにビュアリは、「際限なき進歩」に競合する新たな観念の出現を明らかにしたのである。

それまで「際限なき進歩」と競合していたのは「退歩」

だった。ところが今ここに現れたのはこれと別の観念である。それは、進歩は終着点を持つとする「終局に向かう進歩」の観念だ。つまり、もう一つの進歩観念が「際限なき進歩」への抵抗を始めたのである。

では、これは「際限なき進歩」を失墜させるほどの抵抗だったのだろうか？

決してそうではなかった。それどころか、十九世紀の人々は「衰微や破滅の恐怖におそわれることなく、科学の際限のない力を信頼する」ようになった(1920:346=一九五三:三三八、訳文修正)。こうしてとうとう「進歩の観念は前世紀の七〇、八〇年代には一般的な信仰箇条 *general article of faith* となった」のだという(1920:346=一九五三:三三八)。

以上のように、一度は「終局に向かう進歩」の抵抗が見られたのだが、その後は再び「際限なき進歩」の観念が広まった——ビュアリが描いていたのは、じつはこうした紆余曲折の過程だったのである。

四・三 方法と知見の論理

ビュアリの歴史叙述の特徴を改めて確認しよう。著作の冒頭では単一の進歩観念に照準したビュアリだったが、論述の終盤は、もう一つの進歩観念に紙幅を割いた。しかし著述の

締めくくりは、再び本来の「際限なき進歩」の議論となった。なぜ、このように著述の対象が二転三転したのか。それはビュアリが最初に設定した「際限なき進歩」という論題と、実際に扱ったテキストの間に距離があったからだ。このために、途中で本題を離れて「終局に向かう進歩」に言及せざるをえなかったのだ。

このことは決してビュアリの議論の価値を低めるものではない。むしろ、それは次のような長所を示しているのではないだろうか。

第一に、ビュアリの議論はあくまでも「際限なき進歩」に照準するものだった。この方針のおかげで、似て非なる観念を区別しながら思想史の展開を記述できた。

第二に、それは現実のテキストの中から、当初の規定とは異なる観念を析出することも可能にした。だからこそビュアリは、二つの進歩観念間の競合を発見できたのだ。

これらの特徴はそれぞれ、研究の方法と知見が明晰であることを示すものだ。この点で、ビュアリの歴史叙述は経験的な研究として優れたものであったと評価される。

では、このような研究の特徴は後世の研究者にも正しく理解されただろうか。この点については、節を改めて考えていこう。

五 進歩と退歩の複数性

——ニスベットの研究知見

五― 前近代からの継承

本節では米国のロバート・A・ニスベット (Robert Alexander Nisbet, 1913-1996) を取り上げる。長くカリフォルニア大学バークレー校で教鞭を取った後、晩年はコロンビア大学に移って社会学理論と思想史を講じた社会学者である。⁽⁴⁾

歴史の捉え方に関する研究は、ニスベットのライフ・ワークの一つだった。ここでは、その問題意識を『社会変動と歴史』(二九六九年)の中に探りたい。同書の第一、部を中心に、古典古代から二十世紀までの記述を確認していこう。

その議論は、歴史はどのように語られてきたのかという問題から始まる。

ニスベットによれば、西欧諸国の歴史の進展は、社会の「死滅」や「退廃」「発展」「誕生」といった言葉で語られてきた。だが、本当に文化や社会の中に死や生を見た人はいないはずだ。これらの言葉は何なのか。

こうした言葉は、ことごとく、有機的世界、つまり植

物ないし動物の生活環 (the cycle) と関係している。…有機的世界ならば、これらの言葉は文字通りの意味を持ち、経験的である。しかし、社会的または文化的な現象に用いられるとき、それらは文字通りのものではなくなる。それらはメタファーとなるのである。(Nisbet, 1969: 34 = 一九八七: 一六、訳文修正)

すなわち、人間は有機物の「成長 growth」のメタファーを用いて歴史の進展のあり方を言い表してきたのだ——このことが以下の議論の出発点となる。

近代以前、このようなメタファーによる歴史の捉え方は大きく二つあったとニスベットはいう。

一つは、古典古代に見られた生成と消滅の繰り返しの見方である。こうした捉え方は「循環 cycle」のイメージあるいは循環説と呼べる (1969: 29 = 一九八七: 四八)。

ニスベットによれば、古代ギリシアや古代ローマの循環説には、人間の力による社会の改善という考えがあった。このことから、ビュアリの所説の「誤謬」を指摘できるといふ。

ビュアリの最たる誤謬は、進歩の概念の単一的な概念化 single conception —— 後述のようにヨーロッパの

十八世紀と十九世紀に盛んであった理解——を採用したこと。そして、これが唯一の進歩の観念だと宣言してしまったことである。(Nisbet 1969: 47 = 一九八七: 七二、強調原文、訳文修正)

このように、ニスベットはビュアリの「単一的な概念化」に疑問を呈する。言い換えれば、近代の観念だけを進歩と捉えることを問題視したのである。

もう一つの歴史の捉え方は中世キリスト教に見られるものだという。

ニスベットによれば、聖アウグスティヌスは、この世において「循環にもとづいた、人類の発展」が生じることを認めていた (1969: 67 = 一九八七: 九八)。この世界観では、成熟と衰退が繰り返された後に「循環の終結」が生じるとされる (1969: 68 = 一九八七: 一〇〇)。そして、さらにその後には「神の国における永遠なる再現」が訪れるとされる (1969: 71 = 一九八七: 一〇二)。

このような歴史の語りはキリスト教的な「叙事詩 epic」と呼べるものだ。それはいま記したような内容から、人類の歩みを進歩と捉えるものだったと言える——こうニスベットは指摘する (1969: 85 = 一九八七: 一二二)。

以上のように、歴史の進展は古典古代以来、成長のメタファーを用いて語られてきた。そのため、歴史の過程は進歩と退歩の両面において描かれてきた。このように、ニスベットは二つの側面が常に隣り合わせであったことを示している。このことから、近代以前にも〈進歩〉は認められる——これがニスベットの最初の指摘だった。

五― 〈際限なき進歩〉対〈退歩〉

これに続いてニスベットは、近代の思想にも同じような二つの側面を見出そうとした。

では、近代の進歩観念とはどのようなものだろうか？

その特徴の一つは「過去の総合と未来の預言」という点にある、とニスベットは述べる。

これはビュアリにおいても指摘されていたことだ。ただしニスベットによれば、この「総合」は循環説や叙事詩の特徴でもあった (1969: 106 = 一九八七: 一四八)。その意味で近代の進歩観念は、古典古代以来の歴史観の「修正」にすぎない」のである (1969: 106 = 一九八七: 一四八、強調引用者)。

しかしもう一つ、〈際限なき進歩〉という形をとることも近代の進歩観念の特徴だという。

これはビュアリの指摘を踏襲したものだ。実際、ニスベッ

トはビュアリと同様、一八世紀末のコンドルセーに言及する。そこには「未来に向かって際限なく、拡がる *extending indefinitely* という進歩の捉え方」が確認される (1969: 106-107 = 一九八七: 一四八、訳文修正、強調引用者)。それはやはり、近代以前には見られなかった観念だと理解される。

したがって、〈際限なき進歩〉は近代以前の観念を引き継いでいる。と同時に、近代に固有の観念なのである。もともとニスベットは、ビュアリが〈際限なき進歩〉ばかりを論じることには批判的だった。しかし、それが近代にのみ見られることには同意したのだ。

では、近代の進歩観念はこれだけのだろうか？

ニスベットによれば、コンドルセーが「普遍的進歩 *universal progress* という十八世紀のコラールをひとりで歌った: [とこう]」ことは決して事実ではない (1969: 122 = 一九八七: 一六八)。これは〈際限なき進歩〉以外にも近代固有の進歩観念があることを示唆するものだ。

ところが、その他にどのような近代固有の観念があるかは述べられていない。ビュアリの〈終局に向かう進歩〉への言及も見られない。このもう一つの近代的観念をニスベットは読み逃したと思われる。この点に関して、同書の議論は曖昧さを残したままとなる。¹⁵⁾

では反対に、進歩の観念だけが近代の歴史の捉え方なのだろうか？

ニスベットは、決してそうではないことを指摘する。近代においても進歩以外の観念があることは看過できない。

我々は、歴史的变化についての進歩的な見方にみられる画一的な用語: によってこの二つの世紀 (十九・二十世紀——引用者註) を見ることに、あまりにもならされている。そのため、進歩の預言者たちと並んで: 改善以外のもの (衰退や消失——引用者註) をみた人々がいることを想起するとき、驚いてしまうほどである。 (1969: 125 = 一九八七: 一七一、強調引用者)

実際、十八・十九世紀にも衰退 (*decline*) や退化 (*degeneration*) の考えは広く見られた。それら退歩の観念は「十九世紀および二十世紀初頭」の思想にも現れる (1969: 126 = 一九八七: 一七二)。これはたしかにビュアリの記述から漏れてしまっていた事実である。

ニスベットは、これらの観念はすべて「単一のメタファアー的概念構成 *single metaphoric conception*」 (1969: 211 = 一九八七: 二七五) によって説明されるとする。古典古代の

循環論、中世キリスト教の叙事詩、そして近代の「線形的な進歩」は、形を変えながら一つのメタファーを引き継いできたのである (1969: 211-212 = 一九八七: 二七六、訳文修正)。

以上に見たように、循環論と叙事詩にはもともと進歩と退歩の観念があった。近代はここに〈際限なき進歩〉が加わったのだ——こうした様々な歴史観の併存状況を説明しえたのがニスベットの研究成果だった。

要約すると、ニスベットは時代を問わず〈進歩〉と〈退歩〉が見られることを明らかにした。一方、ビュアリ同様に〈際限なき進歩〉の観念の近代性を認めたが、その他には近代固有の観念を指摘しなかった——ここまですが一九六九年の『社会変動と歴史』の特徴である。

五・三 複数の〈進歩〉の行方

これと比べると、一九八〇年の著作『進歩観念の歴史』は様々な点で異なっている。この大著は〈進歩〉を対象を絞って改めて古典古代から二〇世紀までの変遷を跡付けたものだ。メタファー論と〈退歩〉の記述はなくなるが、〈進歩〉に関しては新たな洞察が加わる。

その第一部は、近代以前の進歩観念を論じている。前者に続き、古典古代と中世にも進歩の観念が見られたことが力説

される。ビュアリへの批判も記されている。

一方、近代については第二部で論じられる。だが、ビュアリへの言及は見られない。それどころか、前著で認めていた〈際限なき進歩〉の重要性にもニスベットは触れていない。

しかし、ビュアリとの格闘がなくなったわけではなさそうだ。その形跡は、十八・十九世紀に関する章に現れる。そこでニスベットは、進歩観念を二つの型に分けて論じている。

その一つは「自由としての進歩」である。これはコンドルセーのように、「自由への制約が取り除かれる」ことで進歩は可能となるとする考えだ (Nisbet 1980: 179)。ビュアリの〈際限なき進歩〉の規定とは異なるが、同じ思想の別の側面を言い当てた類型と思われる。

もう一つは「力としての進歩」である。これはコントに見られるような「人々の意識を方向付けたり形作ったりしようとする力」の拡大過程を意味する (Nisbet 1980: 237)。〈終局に向かう進歩〉という規定こそないが、それに重なる類型と考えられる。¹⁶⁾

だとすれば、〈退歩〉だけでなく〈進歩〉の中からも〈際限なき進歩〉や〈自由としての進歩〉への抵抗が生じたことになる。ニスベットはこれによって、前著で曖昧なまま残されていた点を解決したのではないか——今後の読解の可能性

として記憶しておきたい点だ。

しかし、これはあくまでも推定である。これだけではビュアリとの関係を確定できない。そのため、次節では前作の『社会変動と歴史』だけを用いて両名の比較を行いたい。

六 ビュアリからニスベットへ ——継承と断絶

六―「際限なき進歩」への抵抗

以上の結果を踏まえて、ビュアリとニスベットの関係を明らかにしよう。

まず指摘できるのは、研究方法①の継承という関係である。

思い出そう。ビュアリは進歩が「際限なく、継続するだろう」という観念を対象としたが、ニスベットは死滅や発展という「メタファー」を対象としたのだった。これによって、ニスベットはビュアリの単一的な概念化を論難した。そしてニスベット自身は、これに代えて、進歩の観念の複数的な概念化を提示したのである。

だが、これを両名の相違とだけ解するのは適当でない。ニスベットの概念化は、ビュアリの概念化を包含して相対化する

さらに、〈際限なき進歩〉は近代に固有の観念であることも共通の知見だった。ビュアリに続いてニスベットも、この観念が近代にのみ見られることを確認していたのだ。

最後に、これ以外にも別様の進歩観念が存在し、〈際限なき進歩〉と競合していたという見解もあった——具体的な内容は異なるものの、指摘の大筋は同一だったのだ。

以上の考察から、二人の方法には批判的な発展の関係があり、ビュアリの知見は概ねニスベットによって追認されたのだ、という要約が引き出せる。

このことは、ビュアリの研究内容の核心部分がニスベットにおいても踏襲されていたことを意味する。それは〈際限なき進歩〉への「抵抗」と呼べるようなモチーフである。

これは両名の研究系譜を貫く基本テーゼであると見てよいだろう。

六―二 基本テーゼとその周辺

しかし、両名の共通点を他の部分にも見出すのは困難である。

とりわけ、近代以前に関する二人の議論は食い違っていた。ビュアリは、古典古代および中世の人々は〈際限なき進歩〉の観念など持たなかったと論じたが、これに対してニスベッ

るものだった。だとすれば、ニスベットはビュアリの議論を拡張したと言うべきだ。では、その意義はどこにあるのか。第一に、これは批判的な継承だったと言える。これはニスベットだけに帰せられる功績ではない。ビュアリが歴史叙述に先立って対象を設定したことが重要だった。これがあつたからこそニスベットはビュアリの概念化を批判できたのである。

第二に、ここには発展的な継承も見いだせる。ビュアリの概念化の拡張によって、ニスベットは、他にも様々な進歩の観念があるという視座を示した。これによって、循環説と叙事詩の中にも、進歩の観念を認められたのである。

次に指摘できるのは、これらが研究知見②の継承を可能にしたことである。

実際、ビュアリとニスベットの間には大きく四つの共通知見があつた。

一つは、近代の歴史の捉え方は〈進歩〉だけでないという点である。退歩の観念は近代も存続し、進歩の観念との対抗関係を保っていたのだ。

もう一つは、〈進歩〉の観念も単一ではない、という点である。〈際限なき進歩〉は進歩観念の一つであるが、唯一の進歩観念ではないのだ。

トは、古典古代と中世にも「人類の発展」のイメージがあつた、と反発していたからだ。

とはいえ、これは強調点の違いによるものにすぎない。見てきた通り、ビュアリは〈際限なき進歩〉だけを〈進歩〉と規定した。一方のニスベットは〈進歩〉を〈際限なき進歩〉以外にも認めた。そのため、いずれの規定をとるかによって近代以前に関する見解は真逆になる。二人の見解の相違は、それぞれの概念化の特徴を反映しているのである。

これに対して、近代に関する議論はもっと大きく対立する。これにはいくつかの争点がある。

その一つは、〈際限なき進歩〉に対抗する別様の進歩観念に関するものだ。ビュアリは〈終局に向かう進歩〉という類型を抽出したが、この重要な知見をニスベットは見落としてしまった。これはニスベットの失策だったと言える。

もう一つの争点は、〈進歩〉そのものへの対抗観念に関するものだ。ビュアリは、進歩と退歩の観念が競合する事実と言及しただけだった。これに対してニスベットは、進歩と退歩が交互に生じたり、並行して生じたりする捉え方を提示した。これはニスベットに独自の成果と言える。

このように、両名の議論の間には数々の断絶が見られる。このことは、それぞれが固有の知見を有していたことを意味

する。そのため、ビュアリとニスベットの議論を継承、関係に回収することは適当でないだろう。

しかし、このことは決して先述の基本テーゼを傷つけるものではない。それどころか、それは基本テーゼの周辺にも豊富な知見がちりばめられていることを示すものと理解できる。これまで、このような研究系譜が存在することは全く知られていなかった。本研究の新規知見だと言えるだろう。

七 本研究の含意

以上のような西欧思想史の把握は、ビュアリとニスベットのだけ見られるものだろうか？ 一九八〇年以降の研究を一瞥して考えてみよう。

たとえば英国ヴィクトリア朝期の進化思想に関するピーター・ボウラーの研究は、様々な進化思想史の中に「システムを完全に発展しきった状態に向かわせる」タイプの発展観があったことを示している（Bowler 1989＝一九九五・二四、強調引用者）。これは本研究で述べてきた〈終局に向かう進歩〉の観念の重要性を論じたものと理解できる。

また十九世紀後半の英・仏・伊国を対象に「衰退」説を論じたダニエル・ピックは、進歩観念の陰にはしばしば退歩観

念が生じたことを指摘している（Pick 1989）。これも本研究で述べてきたように〈進歩〉と〈退歩〉が併存していることを確認したものと言える。

これらの研究は、歴史の捉え方が〈際限なき進歩〉以外にも様々あったことを強調している。こうした力点は、上述の「基本テーゼ」と強く響き合うものだ。

このようなことを念頭に置いて考えると、第一節で見たラッシュュラの議論には問題が多いことを指摘できる。

まず気づくのは、ラッシュュとフクヤマの議論が、進歩観念史の基本テーゼから逸脱しているということだ。

事実、ビュアリとニスベットの歴史叙述の成果を踏まえれば、ラッシュュの議論のように〈際限なき進歩〉だけを進歩観念と捉えるのは一面的である。また、フクヤマのように〈終局に向かう進歩〉だけを「普遍的な歴史」の「最良の部分」と断じるのも一面的と言える。

次に、フクヤマとウォーラー・ステインがビュアリとニスベットの研究を挙げたことは妥当だったと言える。

しかし、フクヤマのように両名の研究を「二つのきわめて異なった視点」と述べるだけでは、どちらの視点に依拠したのが不明瞭だ。一方、ウォーラー・ステインのように「西洋哲学の全歴史」を一括りにするのも、前近代から近代への変

遷に関する討論を看過するものだ。

これらの問題は、元を辿れば〈際限なき進歩〉への抵抗という構図の読み落としに起因している。今後、このような読み落としに基づく議論は批判されるべきだろう。

ただしラッシュュについては留保が必要だ。たしかに、彼が「近代の進歩の概念化」は〈際限なき進歩〉だ、と述べたのは不適切だった。しかしラッシュュは二十世紀のテキストを引用していたのだから、もっと控えめに「二十世紀の進歩の概念化」が〈際限なき進歩〉だと述べておけば問題は小さかったのだ。

では、二十世紀に関するラッシュュの見解は正しいのだろうか？ そうだとすれば〈際限なき進歩〉への抵抗という十九世紀の構図は、二十世紀には見られないのだろうか？ — 興味は尽きないが、本稿の議論からは判断の付かない問題だ。別の機会に改めて論じたい。

八 むすびに

本稿では、ビュアリの著作『進歩の観念』とニスベットの『社会変動と歴史』を中心として両名の研究を比較し、十九世紀の歴史の捉え方について考察した。

これを通じて判明したのは、ビュアリは近代における〈際限なき進歩〉の普及を論じたが、ビュアリに批判的なニスベットも、この観念の近代性を認めていたことである。

その一方で、ビュアリは〈終局に向かう進歩〉の出現を指摘し、ニスベットも〈退歩〉等の存続に注意を促すことで、それらもまた重要な観念だったことを明らかにしていた。

これらの議論から、近代においても〈際限なき進歩〉は唯一の進歩観念ではなかったこと、そこには常に〈際限なき進歩〉への抵抗があったことが浮かび上がる。

以上の結果を通じて、両名の間には一定の系譜関係が認められること、そしてその基本テーゼおよび周辺の知見は、現在の歴史観の反省においても有益であることが示唆された。

本稿は進歩観念史の研究史について考察するものだったが、この系譜の中に現れたニスベットの方法は、広く社会科学の歴史を捉える上で重要なものと考えられる。

この論考が今後、進歩観念史との関わりの中で社会科学の歴史を再検討し、近代文化の反省に寄与する試みにつながることを期待される。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP19K02145 の助成を受けたもので

す。日本社会学会および「時間の社会学」研究会では有益な示唆を頂きました。本誌編集委員会と査読者の先生方にも詳細な助言を頂きました。この場を借りて、感謝申し上げます。

註

- (1) 『国際社会科学辞典第二版』の一項目「進歩」は、両者の関わりを簡潔に記している。それによれば、進歩の観念は「一九世紀、生まれたばかりの社会科学にとっては魅力的な分析用の構成物」だったのである (Ngwane 2008: 631)。
- (2) シュペンクラーは、西欧諸国の「世界史」は「古代―中世―近代（という）…貧弱な、無意味な図式」だったと論難した (Spengler 1918/1959 = 二〇一七：二八)。一方ウェルズは、「これまでヨーロッパの歴史家は、アジアの高原、ペルシアやインド、中国といった個々の文明が人類のドラマにおいて演じている重要な役割をなんと過小視してきたことだろう」と批判した (Wells 1920 = 二〇二二：六、訳文修正)。
- (3) 社会学の研究は、社会学説との関係で進歩観念などの歴史観を論じたり (田辺一九三〇)、社会意識の一形態として歴史観を論じたり (Mannheim 1929 = 一九六八)、歴史と未来の意識を論じた (Urry 2016 = 二〇一九)。

- (4) 任意の「観念:idea」を対象とする思想史の研究方法である。「観念の歴史とは…哲学の歴史を扱う際に…厳重な体系の中に切り込んでいき…体系を構成要素、すなわち単位観念とも呼べるものに分割する」ものとされる (Lovejoy 1936 = 一九七五：十二)。同様の手法は社会学史の研究にも適用されている (e.g. Nisbet 1966)。なお、本研究では扱わないが「概念史 conceptual history」と呼ばれる研究アプローチも存在する (e.g. Koselleck u. Meier 1975)。

- (5) 吉田 (二〇〇八) はレオン・ブラムソンと宇賀博の研究方法を分析したが、ニスベットの影響については議論していない。しかしブラムソンは、自ら「観念の歴史」の方法を論じ (Branson 1961: 4)、ニスベットの「秩序」観念の議論を引き継いだ (Nisbet 1952; Branson 1961: 13-14)。また宇賀の研究も、ニスベットの言う「『ロミニュティ』の観念」を対象とするものだったのである (Nisbet 1966; 宇賀一九七一：十九)。なお、本稿ではブラムソンや宇賀が参照した研究でなく、ニスベットの後の年、作品 (Nisbet 1969, 1980) を取り上げるが、「観念の歴史」のアプローチは上記四点のすべてで適用されていると考えられる。

- (6) 本稿の〈無限なき進歩〉は「indefinite progress」の観念を表すものとする。「indefinite」は「先が見えない、考えら

れない、分からない、といった意味。本稿では、無限がない、無限のない、無限なき」という訳をあてる。「infinite」とは別の語であることに注意。

- (7) ラッシュは、二十世紀前半のカール・ベッカーやルイス・マンフォードを引用して〈終局に向かう進歩〉の破綻を示唆している。一方、二十世紀後半の E・H・カーを引用して、現代の人々は「無制限の進歩 unlimited progress」「何らの制限にも服しない subject to no limit」ような進歩を信じているとした (Carr 1961 in Lash 1991: 42)。

- (8) ウォーラーステインは「西洋哲学の全歴史に、その痕跡を跡付けようとするものもある」と述べながら (Wallerstein 1999 = 2001: 306)、二つの文献を並べただけだった。

J. B. Bury, *The Idea of Progress ...* 参照。Robert A. Nisbet, *History of the Idea of Progress ...* 参照。 (Wallerstein 1999: 257 = 二〇〇一：三二九)

なお、別の箇所でもウォーラーステインらは「無制約の進歩 unlimited progress」と社会状態の「着実な改善」という「進歩の信念」に触れているが (Wallerstein et al. 1996: 4, 81 = 一九九六：一九、一五二、訳文修正)、それらの内容を

明確に説明してはいない。

- (9) 歴史研究者の三宅正樹は「二十世紀の歴史叙述」の代表としてビュアリ (三宅の表記ではベリー)、トインビー、ニスベットの著作を挙げ、彼らは「上昇する無限の直線的時間に対応する」ような進歩の観念について述べていたとするが、三名の研究手法等は吟味されていない (三宅二〇〇四：二一四)。また「無限」や「直線的」の語は真木悠介を参照したものというが (三宅二〇〇四：一八三)、『時間の比較社会学』は進歩論や変動論でないこと (真木一九八二)、「時間と社会変動を同一視するのは基本的に誤り」であること (Giddens 1976 = 一九九八：二二三) に注意して議論することが必要だ。

- (10) 本稿の表記「ビュアリ」は森島恒雄の訳に従ったもの (Bury 1913 = 一九八三)。他の邦訳書は「ビュアリー」「ベリ」などと表記している (Bury 1909 = 一九九〇; Bury 1920 = 一九五三)。

- (11) 北部アイルランドに生まれ、ダブリン大学で歴史研究に進んだ。古代史の研究者として業績を積み、後期ローマ帝国・ビザンチン帝国史 (二八八九年、一九一二年、一九二三年等)、古代ギリシア史 (一九〇〇年)、古代ギリシア史学史 (一九〇九年) の著作を出版した。一九〇二年ケンブリッジ

に移り、ケンブリッジ古代史七巻、ケンブリッジ中世史八巻の編集者となる。歴史学界の重鎮。

- (12) ビュアリは進化思想の影響についても検討している。それによれば、十九世紀中葉の進化思想は〈際限なき進歩〉の考えを後押しした。一方、十九世紀末の進化思想は進化に伴う退歩への危惧を生み出した。しかし、これは〈際限なき進歩〉への抵抗には寄与しなかったと思われる。今や「進化は望ましい方向へ進んでいるかどうか」という問題は、研究者の気質に従って解答される」(1920: 345 = 一九五三: 三三七)。ビュアリの記述は、思想家たちが〈際限なき進歩〉から距離を置き、かわって世間一般の人々がその担い手となったことを示唆するにとどまっている。

- (13) このことは〈終局に向かう進歩〉による抵抗が弱まったことを示唆している。ビュアリは同書の総括部分でその要因を考察している。歴史の進展に「終わりがある」という考えは、知識の獲得には終着点があり、その地点に立てば全ての歴史を見通せる（そして、その先には何の進展もないと断言できる）などとする「窮竟性 finality の幻想」に依拠するものだ。このような幻想は「際限のない」知識獲得という信念によって打ち砕かれたのだ (1920: 351 = 一九五三: 三四二)。

ろう。しかしニスベットの記述では「普遍的進歩」や「線形的進歩」の中に一緒くたにされてしまう。

このように、近代固有の進歩観念の間の違いを読み取れなかったことが一九六九年の著作の弱点だった。後述のように、一九八〇年の著作はこの点について改善がある。

- (16) これは、一七五〇年から一九〇〇年頃に生じた「ナショナルリズムやステイティズム、ユートピアニズムやレイシズム」を念頭に置いたものだという（ルソー、フィヒテ、ヘーゲル、サンシモン、コント、マルクス、ゴビンノー等）。

- (17) 何が抵抗を行ったのかについて、兩名の見解は異なっていた。しかし、〈際限なき進歩〉への対抗があったことについて、兩名の見解は一致していた。ニスベットは、そうとは知らずにビュアリの見解を踏襲していたと言える。なお、こうした考察は、あくまでもテキスト比較に基づく解釈である。当人たちがこの「合意点」に合意するだろうという合意は一切ない。

- (18) この点は今まで指摘されてこなかった。その原因の一つは、この領域の研究史が十分に把握されていないことだろう。ボウラーはビュアリの〈終局に向かう進歩〉論を引用するべきだったが、ニスベットの「力としての進歩」を参照しただけである (Bowler 1989 = 一九九五: 八〇)。ビッ

- (14) ニスベットはロサンゼルス生まれ、カリフォルニア大学バークレー校に進んで社会学を学んだ。バークレー時代は歴史哲学者にして社会学者であるフレデリック・J・テガートのもと、歴史、社会変動論の素養を身に着けた。社会学の歴史と理論に通じ、秩序や紐帯といった観念について書いた (cf. Stoen 2000)。

- (15) 同書の後半は十九世紀を迂回し、二十世紀に記述が及ぶ。その箇所（「際限なき進歩」は「線形的進歩」という語に置き換えられる）。

… 際限のない未来 indefinite future に向かう線形的進歩 linear progress という観念は、なお生き生きとして
いる… [この観念は] 教義的信念にあふれた多くの論説を生み出している。(1969: 220 = 一九八七: 二八七、訳文修正)

この「線形的進歩」の例としては、ティヤール＝ド＝シャルダンの「究極的な思想共同体」や、ソヴィエト連邦の「調和的な諸関係が… 樹立されるだろう」といった考えが挙げられる (1969: 221-222 = 一九八七: 二八九-二九〇)。これらはビュアリの観点から見れば〈終局に向かう進歩〉だ

クはビュアリやニスベットの研究内容を把握しないまま、兩名の著述では進歩の観念だけが「その時代の公理であると解されてしまう」(Pick 1989: 12)と誤解している。また P・ボウラー (Bowler 1989) と M・ホーキンス (Hawkins 1997) を通じて〈進歩〉と〈退歩〉の議論を検討した吉田 (二〇二〇: 一四八) は、それらの研究の背景をホーフスタターとバニスターにしか見ていない。

文献

- Beard, Charles A., 1955, "Introduction" to John B. Bury, [1920]1932, *The Idea of Progress: An Inquiry into Its Origin and Growth*, New York, NY: Dover Publications, iv-xi.
- Bock, Kenneth, 1978, "Theories of Progress, Development, Evolution," Tom Bottomore and Robert Nisbet eds., *A History of Sociological Analysis*, New York, NY: Basic Books, 39-79.
- Bowler, Peter, 1989, *The Invention of Progress: The Victorians and The Past*, Oxford: Basil Blackwell. (岡崎修訳「一九九五」『進歩の発明——ヴィクトリア時代の歴史意識』平凡社)
- Bramson, Leon, 1961, *The Political Context of Sociology*, Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Bury, John B., 1909, *The Ancient Greek Historians*, London: Mac-

- milan. (高山一十訳) 一九九〇、『古代ギリシアの歴史家たち』修文館)
- , 1913, *A History of Freedom of Thought*, Oxford: Oxford University Press. (森島恒雄訳) 一九八三、『思想の自由の歴史』岩波書店)
- , 1920, *The Idea of Progress: An Inquiry into Its Origin and Growth*, London: Macmillan. (高里良恭訳) 一九二八、『人類進歩の史的考察』博文館 (同訳) 一九五三、『進歩の觀念』創元社)
- , 1930, *Selected Essays*, Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Carr, Edward Hallet, 1961, *What is History?* Cambridge, UK: University of Cambridge. (清水幾太郎訳) 一九六三、『歴史とは何か』岩波書店)
- Delvaile, Charles, 1910, *Essai sur l'histoire de l'idée de progrès jusqu'à la fin du XVIII^e siècle*, Paris: Félix Alcan.
- Edelstein, Ludwig, 1967, *The Idea of Progress in Classical Antiquity*, Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.
- Fukuyama, Francis, 1992, *The End of History and the Last Man*, New York, NY: Free Press. (渡部武一訳) 二〇〇五、『歴史の終わる (上)』三笠書房)
- Giddens, Anthony, 1976, *Central Problems in Social Theory*, Berkeley, CA: University of California Press. (友枝敏雄・今田高俊・森重雄訳) 一九八九、『社会理論の最前線』二二五一―二五五)
- Ginsberg, Morris, [1968]1973, "Progress in the Modern Era," Philip Wiener ed., *Dictionary of the History of Ideas: Studies of Selected Pivotal Ideas*, New York, NY: Charles Scribner's Sons. (見市雅俊訳) 一九九〇、『進歩の觀念 (近代における)』『西洋思想大辞典 (二巻)』平凡社: 六〇九―六二五)
- Goldstein, Doris S., 1977, "J. B. Bury's Philosophy of History: A Reappraisal," *The American Historical Review*, 82 (4), 896-919.
- Hawkins, Mike, 1997, *Social Darwinism and in European and American Thought 1860-1945*, New York, NY: Cambridge University Press.
- Koselleck, Reinhart, und C. Meier, 1975, "Fortschritt," in Reinhart Koselleck, Werner Conze, Otto Brunner (Hrsg.), *Geschichtliche Grundbegriffe. Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland*. Bd. 2, Klett Cotta, Stuttgart, 351-423.
- Lash, Christopher, 1991, *The True and Only Heaven: Progress and its*
- Critics, New York, NY: Norton and company.
- Lovejoy, Arthur, 1936, *The Great Chain of Being*, Cambridge, MA: Cambridge University Press. (内藤健一訳) 一九七五、『存在の大いなる連鎖』晶文舎)
- 真木悠介, 一九八一、『時間の比較社会学』岩波書店
- Mannheim, Karl, 1929, *Ideologie und Utopie*, Bonn: Friedrich Cohen. (鈴木一郎訳) 一九六八、『エトキロギン・ユトピーア』未来社)
- Martin, Kingsley, 1929, *French Liberal Thought in the Eighteenth Century: A Study of Political Ideas from Bayle to Condorcet*, Boston, MA: Little, Brown, and Company.
- 三好正樹, 二〇〇五、『文明と時間』東海大学出版会
- Ngwane, Zalani, 2008, "Progress," William A. Darity Jr. editor in chief, *International Encyclopedia of Social Sciences*, 2nd edition, Vol.6, Detroit, MI: Thomson Gale, 531-3.
- Nisbet, Robert A., 1952, "Conservatism and Sociology," *American Journal of Sociology*, 56 (2), 167-175.
- , 1966, *The Sociological Tradition*, New York, NY: Basic Books.
- , 1969, *Social Change and History: Aspects of the Western Theory of Development*, Oxford, UK: Oxford University Press.
- (高田剛訳) 一九八二、『歴史・メタ・ヒストリー——社会学の本質』岩波書店)
- , 1980, *History of the Idea of Progress*, New York, NY: Basic Books. 2nd edition 1994, *History of the Idea of Progress*, Transaction Publishers. Reprinted 2017, New York, NY: Routledge.
- Pick, Daniel, 1989, *Faces of Degeneration: A European disorder, c.1848-1918*, Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Pollard, Sydney, 1968, *The Idea of Progress: History and Society*, London, UK: C. A. Watts and Company. (岸橋章郎訳) 一九七二、『進歩の思想——歴史と文化』岩波書店)
- Ritter, Harry, 1986, "Progress," in *Dictionary of Concepts of In History*, New York, NY: Greenwood Press, 339-344.
- Spengler, Oswald, 1918-1922, *Der Untergang des Abendlandes: Umriss einer Morphologie der Weltgeschichte*. 1959, gekürzte Ausgabe, München: C. H. Beck. (杉本正俊訳) 二〇一三、『西歐の没落 (一)』中公論新社)
- Stone, Brad Lowell, 2000, *Robert Nisbet: Communitarian Traditionalist*, Wilmington, DE: ISI Books.
- 田辺壽利, 一九三〇, 「パスカルと社会学」(岩波書店『思想』九八: 一一―二二)

- Temperley, Harold, 1930, "Introduction: The Historical Ideas of J. B. Bury," in John B. Bury, 1930, *Selected Essays*, Cambridge, UK: Cambridge University Press, xv-xxxii.
- 宇賀博, 一九七二『社会学的ロマン主義——アメリカ社会学思想史』恒星社厚生閣
- Urry, John, 2016, *What Is the Future?* UK: Wiley. (吉原直樹・高橋雅也・大塚彩美訳, 二〇一九『「未来像」の未来——未来の予測と創造の社会学』作品社)
- van Doren, Charles, 1967, *The Idea of Progress*, New York, NY: Frederick A. Praeger.
- Wallerstein, Immanuel, 1999, *The End of the World as We Know It*, Minneapolis, MN: The Regents of the University of Minnesota. (山下範久訳, 二〇〇一『新しい社会学——二一世紀の脱「社会科学」』藤原書店)
- Wallerstein, Immanuel, et al., 1996, *Open the Social Sciences: Report of the Gulbenkian Commission on the Restructuring of the Social Sciences*, Stanford, CA: Stanford University Press. (山田鏡夫訳, 一九九六『社会科学をひらく』藤原書店)
- Weiler, Bernd, 2007, "Progress, Idea of," George Ritzer ed., *The Blackwell Encyclopedia of Sociology*, Volume VII, Oxford, UK: Blackwell Publishing, 3669-3671.
- Weinberger, Jerry, 2005, "Progress, Idea of," Maryanne Cline Horowitz, editor in Chief, *New Dictionary of the History of Ideas*, Vol.5: *Physics to Syncretism*, Farmington Hills, MI: Thomson Gale, 1912-6.
- Wells, Herbert George, 1920, *The Outline of History: Being a Plain History of Life and Mankind*, New York, NY: The Macmillan. (北川三郎訳, 一九五〇『世界文化史体系(上)』清文堂書店)
- 吉田耕平, 二〇〇九『アメリカにおける自由主義の伝統と社会学の確立——Bramsonと宇賀の学史研究の再検討から』(首都大学・東京都立大学社会学研究会『社会学論考』三〇: 六九—九二)
- , 二〇二〇『「退歩の観念を棄ったのは誰か——P・ホウラーとM・ホーキングズの進化思想史再読」(神戸大学社会学研究会『社会学雑誌』三七: 一二七—一四〇)
- (よしだ・ひろへい 東京都立大学 客員研究員)